



日動労千葉

国鉄千葉動力車労働組合

〒260 千葉市中央区要町2番8号(動力車会館)
電話 (鉄電) 千葉 2935・2936 番
(公) 043 (222) 7207 番

96.8.27 No. 4455

11.10 労働者総決起集会

全国から五〇〇〇人の大結集を！

全ての組合員のみならず！

八月二五日、動力車会館において、労働運動の新たな潮流の形成を目指す「九・一八集会実行委員会」が開催され、決戦状況となつている安保・沖繩闘争と正念場を迎えた国鉄闘争を全力で闘いぬぎ、十一月一〇日に開催される全国労働者総決起集会への五千人結集に向けて、全国に大号令が発せられました。

8・28 反動判決粉砕し
9・8 県民投票勝利へ

戦後五一年目を迎え、世界的に戦争と侵略に突き進む中で、われわれのこれまでの闘いが生き残るのかどうかを賭けた、分岐の年になろうとしています。

安保・沖繩闘争、国鉄闘争、破防法反対闘争が決戦局面を迎え、そしてあらゆる政党が再編過程に入るといふ中で労働者の流動化が始まり、この労働者の怒り、不満、憤りをどのように結集できるかが重要な課題になつてきています。

とりわけ、安保・沖繩闘争をめぐる状況は、沖繩県民二〇万人と日帝・橋本政権との真正面からの激突になつています。この沖繩県民の決起は、橋本政権を追い詰め、完全に打つ手が

ないというにまで状況にまで追い込んでいます。普天間飛行場返還問題は「米軍基地のたらいまわし」として沖繩県民は完全に拒否し、県道一〇四号線越え実弾演習の本土五ヶ所(矢白別、王城寺原、北富士、東富士、日出生台)への移管問題でも完全に暗礁に乗り上げており、今年四月一七日に出された「日米共同宣言」が貫徹できないという状況になつていふのです。

「自分たちの未来は
自分たちで決める」

こうした沖繩県民の怒りの決起は、これまで置かれてきた歴史的な経緯をぬきにすることはできません。「明治維新」を契機とした琉球処分、本土を守るための捨て石としての沖繩戦、国体護持(天皇制の維持)のための米軍への売り渡し、そして七二年のペテン的「本土復帰」とその後の基地の島・沖繩の現実に、「もう我慢できない」「自分たちの未来は自分たちで決めるんだ」という強い意志が昨年九月の少女暴行事件をきっかけとして爆発したのです。

この怒りを封じ込めるために日帝・橋本は、八月二八日の代理署名最高裁判決で反動判決を

下し、沖繩県民の怒りを抑えようとしています。しかし、この怒りはおさまるところか九月八日の沖繩県民投票の勝利としてかちとられようとしています。

この沖繩県民の心、要求を本土労働者がしっかりとらえ、自分たちの要求として安保・沖繩闘争勝利へ闘いぬかなければなりません。

JR総連革マル解体が
国鉄決戦勝利のカギ

さらに、国鉄闘争も完全に正念場を迎えています。

橋本政権は、安保・沖繩問題が完全に行き詰まりと大失業と戦争の時代への突入という状況の中で、安保・沖繩闘争の推進軸であり、労働運動の新たな潮流の結集軸である国鉄闘争陣形の解体を策して、国鉄闘争清算事業団闘争の解体に本格的に乗り出しています。

そして、もう一方では、JR総連革マルの危機が深刻化する中で、自らの生き残りをかけてJRとの「第三次労使共同宣言」を締結し、その直後に国労東京のペンディング職場に二三名の大量不当処分をかけたのです。しかし、その一方で高崎で

は、三名の若い労働者が、JR総連革マルのあまりにひどい組合運営に義憤を感じて国労に加入するという事態が発生しました。JR総連革マルは「グリーンユニオン千人に匹敵する」としてJR当局と結託して暴力的に国労を脱退させたのです。しかし、こうしたJR総連革マルに対する怒りはこの三名に止まるものではなく、JR総連内部のいたるところに怒りが充満し、爆発寸前まで来ていることを物語っています。JR総連革マルは組織の崩壊的危機に直面しているのです。

国鉄決戦の核心は、JR総連革マルとの組織対組織の攻防戦に勝利することにあります。組織的崩壊の危機に立つJR総連革マル解体・一掃へ職場での闘いをさらに強化しよう。

職場から根こそぎで
日比谷野音に結集を

安保・沖繩—国鉄闘争勝利！「大失業と戦争の時代」と対決する闘う労働運動の新しい潮流を目指し、五千人の労働者の結集に向け、動労千葉も職場から根こそぎで決起しよう！十一月一〇日、日比谷野音楽堂に集まろう！